

23日 日曜美術館

魂こがして 青木繁～海を越えた「海の幸」と石橋凌の対話

Eテレ 前9:00～10:00 再 **30日** 後8:00～9:00

何ものにもとらわれない魂の絵——
画家・青木繁の作品世界に俳優・石橋凌が迫る



「海景（布良の海）」（1904年 プリチストン美術館蔵）



布良の浜辺で「海の幸」のポーズをとりながら、
青木に思いをはせる石橋。



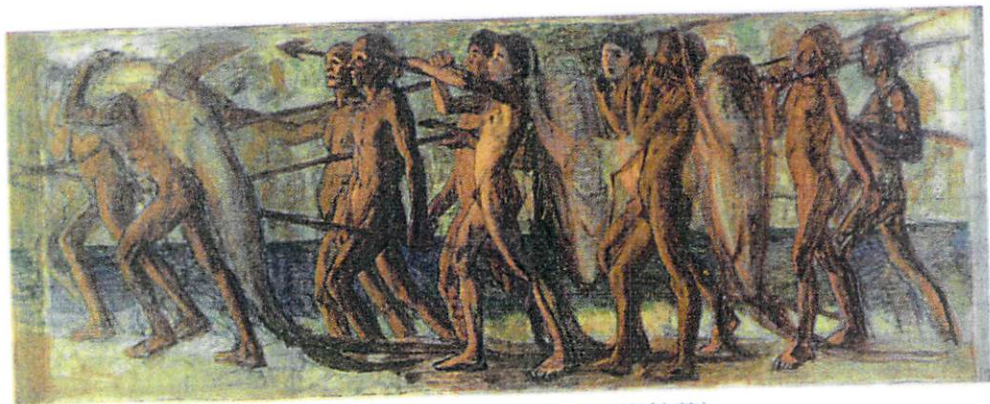
「わだつみのいろこの宮」（重要文化財
1907年 プリチストン美術館蔵）

25火 イッピン

心が落ちつく 天然モダン～静岡の染物

BSプレミアム 後7:30～8:00 再 **1火** 前6:30～7:00

伝統とモダンが融合した静岡の染物



「海の幸」(重要文化財 1904年 プリチストン美術館蔵)

天才と称されながら、波乱の生涯を歩み、28歳という若さで亡くなった画家、青木繁(1882〜1911年)。福岡・久留米の没落士族の家に生まれた青木は、幼少期から芸術に強い興味を持っていた。東京美術学校に入学すると、その才能が花開き、日本の神話に着想を得た作品「黄泉比良坂」で華やかな画壇デビューを飾る。卒業後は、千葉の房総半島にある布良に滞在。そこで制作したのが、代表作「海の幸」だ。荒い筆致と繊細な描写を織り交ぜて描かれた、獲物を担いで歩く男たちの姿には、生命に対する賛美

があふれている。そんな青木の絵に深い思い入れを持つのが、俳優でミュージシャンの石橋凌だ。青木と同じ、福岡・久留米出身の石橋は、子どものころ、緞帳に刺繍された「海の幸」に強い衝撃を受けた。それから50年余り、還暦を過ぎた今、再び青木作品に心を動かされているという。石橋は、彼が絵に込めた思いを感じるため、故郷の久留米や、現在青木の展覧会が行われているフランス・パリのオランジュリー美術館を訪問。作品を鑑賞しながら、その作品世界と激動の人生を見つめる。